

# 構音指導プログラム（基本）

「構音」を媒介にして、子どもと指導者が楽しめる関係  
(通室毎のこの子ども) = (共同作業としての構音の改善)

- I 指導開始音の(初めに指導する誤り音)の選定
- II その音と言える(音づくり⇨初回から4回目までの指導をめど)

## 1. 目的音が出せる

- 方法;子どもと対面しての口形、舌の動き、発声・発語の模倣  
子どもへの名称;「べろのまねっこ」「へんな音のまねっこ」  
「英語のまねっこ」「お口のまねっこ」等々

注) 目的音の子音が簡単に出たからといって、指導者が驚いたり喜んだり、大げさに子どもを褒めたりしない!

## 2. 誤り音の意識化

《 子どもの誤りを肯定しつつ、誤りを自覚させる方法 》  
あくまでも「ゲームのルール」として、×にする

- 模倣した音での判断【○;じょうず, ×;ちがう・へた】
- 舌の形状での判断【○;きゅうりべろ, ×;ぶたべろ】当等

注) 指導者の提示する【+J】を、子どもが「ち」と認識して模倣し側音の【+J】になった場合「(ひらがなの「ち」を書いて)~~さんのは「ち」だね。~~さんは「ち」って上手に言えるんだよね。でも、(【+J】を書いて)今のまねっこは、「べろのまねっこ」の【+J】なんだよ。」と言って、子どもの誤りを否定しない。

※この段階で自己修正できそうな子どもには、自己修正の利点をゲームなどで実感させる!

## 3. 模倣できるようになった構音への意味づけ

※ 導入の時期;「変なべろのまねっこ」などの名称での模倣であれ、最低、子音レベルで目的音が出せるようになってから!

- 誤りの自覚がない場合;例「べろのまねっこの【tʃ】ってね、  
本当はね『ち』なんだよ。」

注) 「ち」をイメージした瞬間に、「あんなに【+J】が上手に言えるようになったの」と思えるほどの【+J】であっても、側音の【+J】に戻ることがある。その場合、「今までは、言えていたはずだから…」と正しい音を出そうと焦らない!

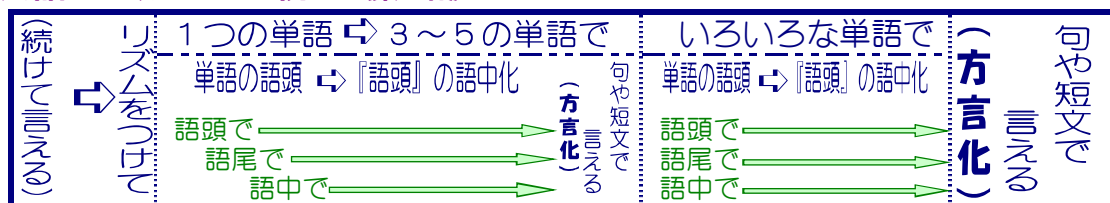
- 誤りの自覚がある場合;「今のが、『ち』なんだよ。」

## 4. 自己修正の導入

※ 導入の時期;「ちいさいの『ち』のイメージ」で【tʃ】と言える

注) 訓練としては扱わない! 自己修正の利点をゲームなどで実感させる!

## III 会話への般化の手続き《概略》



## IV 終了の判断 ⇨ 日常会話での改善がポイント

★ 「どの程度改善したら…? 終了…?’の考え方は、捨てる!

- 特に舌の状態(形態・動き)を正確に把握 ⇨ 舌の脹らみの消失
- 下顎の偏位の消失

いつでも・どこでも 正しい構音で話ができる

# 構音指導プログラム（詳細）

《 子どもに **や・さ・し・く**、効率的に日常会話への般化を促す構音指導 》

- ◎ 構音の指導は、指導の段階に沿って丹念に進められるのが良いわけではない！
- ☆ IIIの段階からは、常に『いかに日常化するか』を考えて指導
- ☆ 但、ある段階の指導を行う際は、徹底した指導を行うこと
- ◎ 子どもの構音の状態を随時的に評価し、構音の状態に呼応するように進めるのが早道
- ◎ 指導が、25回を超えそうな場合（5・6回目には判断）は、丹念に計画的に進める

I	舌の動きの模倣；『何をどうまねるか』の意識化⇨「べろのまねっこ・お口のまねっこ」等々馴染みやすい名称で	
II S 単音	(1)	指導開始音の選定；kj系[kɪ•kɛ•kj•gɪ•gɛ•gɪ]から？ tʃ系[ʃi•ʃɪ•tʃɪ•tʃɪ•tʃɪ]から？
	(2) <sup>*1</sup>	子音つくり（ <sup>*2</sup> 誤りの自覚化）
III S 単音節	(1) <sup>*1</sup>	単音節つくり（ <sup>*2</sup> 誤りの自覚化、 <sup>*3</sup> 意味化）
	(2)	表情をつけて《イントネーション・アクセントの変化、感情的な表現 等々》
	(3) <sup>*4</sup>	続けて 模倣 ⇨ 自発 ① 単純な繰り返し ② リズム《表情をつける；怒ったように・楽しそうに・会話のように等々》
IV S 単語（語頭） S 4～5語文 S 2～5語文 S 模倣 ⇨ 自発	(1)	単純模倣 ⇨ 自発 ⇨ 表情をつけて《イントネーション・アクセントの変化、感情的な表現 等々》
	(2) <sup>*6</sup>	続けて 模倣 ⇨ 自発 ① 単純な繰り返し ② リズム《表情をつける；怒ったように・楽しそうに・会話のように等々》
	(3)	句 ① 共通語的な表現での模倣 ② アクセント等の変化・方言化《会話の様々な表情で》
	(4)	2～5語文 模倣 ⇨ 自発 ① 共通語的な表現での模倣 ② アクセント等の変化・方言化《会話の様々な表情で》 ③ ひっかけまねっこ《「～好き？」「誰と来た？」など答を言いそうにさせる》
V S 3～5語文（語中） S 3～5語文 S 模倣 ⇨ 自発	(1)	1 単語ずつの単純模倣⇨自発⇨表情をつけて《イントネーション・アクセントの変化、感情的な表現 等々》
	(2) <sup>*6</sup>	続けて 模倣 ⇨ 自発 ① 単純な繰り返し ② リズム《表情をつける；怒ったように・楽しそうに・会話のように等々》
	(3)	句 ① 共通語的な表現での模倣 ② アクセント等の変化・方言化《会話の様々な表情で》
	(4)	3～5語文 模倣 ⇨ 自発 ① 共通語的な表現での模倣 ② アクセント等の変化・方言化《会話の様々な表情で》 ③ ひっかけまねっこ《「～好き？」「誰と来た？」など答を言いそうにさせる》
VI 日常化	(1)	文の音読・朗読 自由な文つくり ○ ドリルブック ○ 低学年⇨学年相当の教科書 等々 ○ 絵カード神経衰弱による『面白文つくり』
	(2)	廊下で・待合室で・昇降口・駐車場等々で ⇨ 様々な場面・機会

終了  
判断の

- ◎ 構音（舌の脹らみ・顎の偏位の消失）で判断すること！
- × 発音での判断は、しない。「どの程度きれいになったら」という基準は、ない！

《 詳しくは、HPの「子どもを育む構音への指導」を参照してください 》

- ※1；「英語のまねっこ」「変な音のまねっこ」等々、子どもが親しみやすい名称をつける。
- ※2；「誤りの自覚化」は、原則として正しい構音（単音節）ができてから導入することが望ましいが、子どもによっては、子音の段階で気づくことがあり、その場合は、その時点で誤りの自覚を促してもよい。
- ※3；「意味化」は、「～のまねっこ」で正しい構音ができから導入する。「[チーズ]の[ち]だよ。[ち]って言ってみて」等の指示で正しい構音になれば、「～のまねっこ」から『[ち]の指導』へ移行する。
- ※4；例えば、「ち・ち・ち」と区切って言わせるのは、『続けて』ではない。
- ※5；1つの単語の語頭で、(1)から(4)までを指導する。例えば、(4)②の段階で「かわいい キツネば 見だごどあるんだ。」などでも[kɪ]が言えるようになった時点で、語頭で練習する単語を増やしていく。
- ※6；例えば、「きつね・きつね」と区切って言わせるのは、『続けて』ではない。『3回続けて』の場合、「きつねきつねきつね」の様に、[ne]と[kɪ]が切れ目なく連続（調音）して初めて『続けて』になる。従って、単語の語頭であっても2回目、3回目の[kɪ]は語中の扱いになる。『続けて』の言わせ方を工夫することによって、「語頭」の練習から「語中」の練習へと自然な形で移行するようにしていく。

# 構音指導プログラム(留意事項・注釈の抜粋)

《 子どもに や・さ・し・く、効率的に日常会話への般化を促す構音指導 》

- ◎ 構音の指導は、指導の段階に沿って丹念に進められるのが良いわけではない！
  - ☆ IIIの段階からは、常に『いかに日常化するか』を考えて指導
  - ☆ 但、ある段階の指導を行う際は、徹底した指導を行うこと
- ◎ 子どもの構音の状態を随時・的確に評価し、構音の状態に呼応するように進めるのが早道
- ◎ 指導が、25回を超えそうな場合(5・6回目には判断)は、丹念に計画的に進める

- ※1 ; 「英語のまねっこ」「変な音のまねっこ」等々、子どもが親しみやすい名称をつける。
- ※2 ; 「誤りの自覚化」は、原則として正しい構音(単音節)ができてから導入することが望ましいが、子どもによっては、子音の段階で気づくことがあり、その場合は、その時点で誤りの自覚を促してもよい。
- ※3 ; 「意味化」は、「～～のまねっこ」で正しい構音ができてから導入する。「[チーズ]の[ち]だよ。[ち]って言うてみて」等の指示で正しい構音になれば、「～～のまねっこ」から『[ち]の指導』へ移行する。
- ※4 ; 例えば、「ち・ち・ち」と区切って言わせるのは、『続けて』ではない。
- ※5 ; 1つの単語の語頭で、(1)から(4)までを指導する。例えば、(4)②の段階で「かわいい キツネば 見だごどあるんだ。」などでも[kɪ]が言えるようになった時点で、語頭で練習する単語を増やしていく。
- ※6 ; 例えば、「きつね・きつね」と区切って言わせるのは、『続けて』ではない。『3回続けて』の場合、「きつねきつねきつね」のように、[ne]と[kɪ]が切れ目なく連続(調音)して初めて『続けて』になる。従って、単語の語頭であっても2回目、3回目の[kɪ]は語中の扱いになる。『続けて』の言わせ方を工夫することによって、「語頭」の練習から「語中」の練習へと自然な形で移行するようにしていく。

**「指導開始音の選定」及び「終了の判断」については、HPの「子どもを育む構音への指導」を参照してください**